

Title	イスラム研究の系譜と慶應義塾(一)
Sub Title	The historical trends of Islamic studies in Japan and the role of Keio University (1)
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.91(265)- 106(280)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第二回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラム研究の系譜と慶應義塾（一）

坂本 勉

私がきょうお話ししようとは、慶應においてイスラム研究、とくにその歴史的な研究がどういう形で始まつたのか、三田史学の百年と日本におけるイスラム史学史との二つをにらみながら、慶應のみならず日本の

イスラム史研究の流れを見ていくことにあります。もちろんイスラム研究の流れを見していくことにあります。もちろん歴史ということに限らなければ、前嶋先生以前にも、井筒俊彦先生のような方がすでに慶應においてアラビア語、イスラム思想の研究を始められておりますが、今日の話題が歴史ということですので、前嶋先生に焦点を当てながら話ををしていきます。

ご承知のように、前嶋先生は慶應のご出身ではあります。そこで、慶應のことを話すだけでは、なぜ慶應の中にイスラム研究の芽が出てきたのか、わからなくなつてしまいますので、最初に日本のイスラム研究の流れをたどりながら、慶應のイスラム学事始め、そして前嶋先生が慶應に来られるようになった事情のあたりをお話ししていきます。

二十世紀以前の日本において一番最初に西アジア・イスラム世界の地を踏む栄誉をになったのは、実は福沢諭吉を隨員に含む遣欧使節団の一一行でした。福沢の著した『西航記』という旅行記には幕末期の一八六三年に品川沖を出帆してインド洋から紅海に入り、まだスエズ運河が開通していない前のエジプトに足をしるしたさまが簡単に書かれています。

その後、明治に入ると西アジア・イスラム世界に関心をもち、接触をもつ人々がぼつぼつ出てきます。まず、箕作麟祥という明治初期の有名な法律家です。この人は

明治十年代に日本の条約改正を有利に進めようということで、日本と同様、ヨーロッパ諸国から不平等条約を押しつけられていたエジプトの法律書を翻訳して条約改正の参考にしようとしています。このほか、外務省の官吏であつた吉田正春もイラン、トルコと外交関係、通商条約を結ぶため、一八八〇年にイラン、トルコに赴いています。軍人でも西アジアに早くから関心を持つ人がおりました。一八九五年、当時、参謀本部の将校を務めていた福島安正が、恐らくロシア関係の情報を収集する目的でどうか、トルコ、イラン、アラビア半島に軍事情勢視察に赴いています。

こうした一群の人たちが明治の比較的早い時期にイスラム世界と接触をもつておきましたが、慶應とのかわりで、一人の忘れてならぬ人物を登場させなければなりません。それは家永豊吉という人です。彼は一八九九一九〇〇（明治三二—三三）年にイラン、トルコ、インドに阿片の事情調査に赴き、帰国後『西亞細旅行記』（民友社、明治三三年）を出版しました。この人がどういう人なのか、実は余りよくわかりません。旅行に出ました時は台湾総督府の製薬所の官吏でした。ところがたまたま河北展生先生執筆の「慶應義塾大学文学部教員科

目一覧」を見ておられますと、面白いことを見つけました。家永豊吉が明治一十六年から三十三年まで、つまり、台灣總督府の官吏として西アジアに赴く直前まで慶應でリースとともに歴史の講義を担当しているのです。歴史の教師から台灣總督府の官吏になぜ突然転進したのかその事情はいまだ解けませんが、慶應にとつては不思議な因縁です。塾員名簿などを見るかぎり、家永の名前をみつけることができず、また『西亞細西旅行記』に序を寄せた徳富蘇峰が「家永豊吉君は余が同年学友也」とあるところから、新島襄門下の同志社の卒業生と思われます。大阪外国语大学の教授で岡崎正孝という方がおられます。この方は明治期の日本人が書いた西アジア旅行記について大変詳しい方なのですが、昨日電話して、「家永さんというのはどういう人だつたのだろうか」と聞いたのですが、「西亞細亞旅行記」を書いたということ以外、その人となりは残念ながらわからないと申しております。ただ、家永豊吉はその後の日本人のイスラム世界認識にかなり影響を残しているようです。徳富健次郎（蘆花）が一九〇六年に聖地エルサレム、イスタンブル、ロシア、シベリアを踏破して『順礼紀行』を著していますが、彼は恐らく兄の蘇峰を介して家永豊吉と親交を結ん

でいたように思われます。

次に二十世紀初頭から第一次大戦前夜にかけての日本におけるイスラム世界認識に移ります。私なりの見方ですけれども、日本人が本格的にイスラム世界の重要性に気づくようになる情報の発進地は二つあつたと思います。いずれも日本の対ロシア戦略の重要な拠点です。一つは、ロシアの東南に位置した満州です。日露戦争が一九〇五年に起りますが、その前あたりからイスラム世界が生活の上でも、戦略の上でも急に身近なものになつてきます。日露戦争が起きた年、一九〇五年に第一次のロシア革命が起きると、ボルガ川の中流域あたりに多数住んでいた（いまでも住んでおります）トルコ系のムスリム、とくにタタール人と呼ばれる人たちが第一次ロシア革命に失望し、敗れて帝政ロシア領内から多数、国外に逃れます。その一部の人たちがシベリア鉄道、支線の東清鉄道を使つて満州に流れてきて、ハルピンあたりにコロニーをつくりました。これらロシア系ムスリムの亡命者と満州を拠点に対ロシアの情報活動に従事する日本人との間に、出会いが生じ実践的なところから日本のイスラム研究がスタートするようになりました。

その例として、アブドル・レシド・イブラヒムという

有名なタタール人と山岡光太郎との関係を挙げておきます。山岡さんは一九〇五年、東京外国语学校のロシア語科を卒業したあと、陸軍通訳として満州に渡ります。そこでアブドル・レシド・イブラヒムと出会います。どのようにきつかけで出会ったのか、詳しくわかつております。山岡さんは一九〇九年、アブドル・レシド・イブラヒムに誘われて日本人として初めてメツカ巡礼に赴きます。その旅行の記録が有名な『アラビア縦断記』です。

こうした民間レベルでのムスリムとの出会いが刺激になつてきます。一九〇八年、東京大学の教授であった白鳥庫吉が満鉄に満州朝鮮歴史地理調査部をつくつたことが、その嚆矢となります。まだイスラム研究という形は取つておりませんが、中国の辺境地域に住んでいたムスリム系の少数民族の歴史研究も視野に入れられ、以後、塞外民族史研究という形で盛んになつてていきます。一九一〇年には東大に東洋史学科がつくられ本格的に市民権を得て将来のイスラム研究につながつていくことになります。東洋史という学問の枠組からイスラム史の研究に入つた人々はイスラム研究の展開を東から西への研究領

域の拡大としてとらえ、自己のよつて立つ立場をいたずらに弁護する傾向が多いように思いますが、私には、もう一つの別なイスラム研究の成立の仕方があつたと考えます。これもまたロシアというものを大変意識したところから出てくるものです。オーストリア＝ハンガリー帝国の首都であったウィーン、日本のロシア戦略の西の情報基地であつたこの町がイスラム研究のもう一つの発信地になつています。ここに駐在していた外交官たちが、ロシアの情報を西から得ることを目的とするうちに、イスラム地域にもいつしか関心を抱くようになつてきます。その代表格が外務大臣をやつたこともある牧野伸顕です。彼は一八九六年から一九〇五年にかけてオーストリア公使を務めておりました。その間に起きたことを後になつて回想録に残しております。これなどをみると、明治のこの時期にすでにイスラム地域、と言つても、その場合はオーストリア＝ハンガリー帝国と国境を接し、バルカン半島を領土に包含していたオスマン朝にもっぱら関心がありますが、国際関係論の立場からバルカン、およびイスラムに接しようとする姿勢がうかがえます。

牧野伸顕を引き継ぐ形で、もう一人すぐれた外交官が出てきます。それは、信夫淳平という人です。彼は一九

一〇年から一九一五年まで、第一次大戦が始まってから一年ぐらいするまで、ウィーンの公使館に務めていました。彼は、その在勤中の見聞をもとにして帰国後、『東欧の夢』という、すぐれた名著を書き残します。この本は、ただ単に書物を読んでまとめたというようなものではなく、実際にバルカンの諸地域を歩いてまとめたすぐれたフィールドワークになつています。いま東欧がいろいろ騒がれていますが、信夫さんの本は、今の水準に照らしてもよくこれだけの情報を集めたなど驚かされるぐらいの内容をもつっています。イスラムとのかかわりで言えば、青年トルコ革命後のオスマン朝の事情、それからマケドニア問題について鋭い分析がされています。

以上、日本のイスラム学事始めについてまとめてみますと、一つの発信地は満州でした。それは、ロシアを東側から多分に意識したものに発しています。あともう一つの発信地は西側からロシアを意識し、バルカンからイスラム世界を射程にいれようと/or>する人たちのいるオーストリア＝ハンガリー帝国の首都ウィーンでした。

ところで、問題は、この時期、慶應のイスラム研究へのかかわりはどうなのかということですが、残念ながらほとんど関心を示していません。強いて挙げれば田中萃

一郎先生が一九〇五年から一九〇八年にかけて、ずいぶ

ん長くイギリス、ドイツに留学され、帰国されてから列国政治史を講義されたり、一連の国際関係の本を著らわしていくことに取つかかりを見つけられるくらいです。

ただ、田中先生御自身が欧米に留学されることによつて、第一次大戦前夜のヨーロッパ世界、あるいはそれに接するオスマン朝をも含めたイスラム世界に対する認識をどのように変えていったのか、私などはぜひ知りたいところです。私自身、実はあまり田中先生のこうした一連の著作を系統的に読んでおりませんのでいつかの機会にまとめてみたいと考えています。

次に第一次大戦が終つた大正中期から昭和初期の時期に話を移させていただきます。この時期は一口で言うと、イスラム世界の大半を支配していたオスマン朝体制が崩壊する時期に当たっています。オスマン朝体制の崩壊というのは何を意味するのかといふと、それまでイスラム世界と言つても、実は大半がオスマン朝の支配下にあつたものですから、日本人のイスラム理解はオスマン朝、とくにその支配民族であつたトルコ・ムスリムを中心にお組み立てられた歴史にもつぱら関心が集中していました。こうした組み立て方の不当さを暴いたのが政治的なオス

マン朝体制の崩壊でした。

オスマン朝が崩壊した後、オスマン朝に支配されたシリア地域で、アラブのナショナリズム運動が起き、アラブの人たちも、彼らのナショナリズム意識に支えらる歴史学をつくる動きが出てきますし、國づくりも進みます。これに対応して、第一次大戦後から昭和初期にかけて、トルコ学の他に、アラブ学が學として一人歩きを始めるようになります。ナショナリズムの動きに応じて学問の細分化が進んだと言えましょう。

こうした流れの中でこの時期、日本のイスラム研究にいくつかの分水嶺があらわれてきます。

第一は、バルカン研究の延長として出てきた、つまりウイーン駐在の外交官などが目指したところの国際関係論的なオスマン朝研究、イスラム研究の流れをひきずつたものです。これは外務省の臨時調査部という大正末期につくられた機関に人を集め、イスラム研究をオーガナイズしていくことになります。これは必ずしもアカデミックな研究機関でありませんでしたけれども、大久保幸次、内藤智秀といったトルコ研究の先達を集めて、次に述べる塞外史研究とは一味ちがつたユニークですぐれた仕事を残しました。大久保幸次さんも内藤智秀さんも、

戦前すでに大学の教壇に立っていましたが、仕事の方はどちらかというと外務省との関係で進めていたと考える方が適當です。

ら独立不羈の性格、白鳥山脈の学風とは異質なものを願う求道の精神が働いていたように思われます。

第二の流れは、白鳥史学を継承する東大の東洋史学科です。ここに白鳥庫吉没後、藤田豊八が教授に迎えられ、東西交渉史、トルコ民族史、塞外史、イスラム史の研究を志す多くの俊秀を育てました。その指導のもとで一九二八年（昭和三年）に卒業論文を書いたのが若き日の前嶋信次先生です。「カスピ海南岸の諸国と唐との通交」（『史学雑誌』三九一一）というのが論文の名前です。この論文のもつ意義は、白鳥山脈に連なる方々が、中国周辺から西へ研究対象を広げたとしてもせいぜいパミール高原止りであったのに對し、アム川を西に越えたところに前嶋先生の先見の明があつたといいます。つまり、本格的に史料的にも漢文史料の呪縛から解放され、領域の上でも西アジア・イスラム世界に踏み入ったということです。これは非常に大きな意味を持つていたのではないであります。いい意味でも悪い意味でも白鳥山脈が磁場としてもついていた塞外民族史から解き放たれて、アラ

以上述べてきた外務省臨時調査部、東大での動きに対して、慶應の方ではどういう動きがあつたのでしょうか。残念ながらこの時期、史学科は田中萃一郎を不慮の事故によつて失い、イスラム研究の面でもまだ山嶺と呼べるものはできていませんでした。ただ、一人のアラビア語の先覚者がいたことは幸運でした。それは、松本重彦先生です。この先生は東大を出た方のようですねけれども、一九一九年から二二年にかけて、慶應の文学部の国史で講義を持たれていた方です。日本史専攻の方であつたにもかかわらず、アラビア語の重要性に早くから気がつかれ、盛んに学生にアラビア語の研究をやるように勧めていたようです。なぜそういうことを松本重彦先生が言つたのかといいますと、松本先生という人は古代のオリエント史、それに神話伝説に大変興味を持つていて、恐らくヘブライ語であるとか東方の諸言語に関心があり、その一つとしてアラビア語の importance に早くから気がついていたようなのです。

ブ史への展望が開けてきたからです。こうした選択を恐らく無意識のうちに行つた裏には、前嶋先生の寡黙なが

松本重彦先生が慶應で講師をされていた時期は一九一九年から二二年までのわずか三年にすぎませんが、この

先生に影響を受けた学生が実は出でています。飯田忠純さんがそれです。飯田さんは一九二一年の卒業生ですが、「回教法制の源流」という卓越した卒業論文を提出しています。前嶋先生が東大に出した論文より実に七年も早くこのようなイスラム関係の論文が出現したことは驚きです。なぜこんな論文が出てきたのか、やはり松本重彦先生の影響が大変大きかったのではないかと考えられます。飯田さんの論文は、白鳥山脈のようなエスタブリッシュメントなどところで書かれたものでないので人の話題になることが少く、忘れられている面がありますが、イスラム法研究に不朽の礎石を残す、私たちが誇れる仕事の一つです。俊才を詔わされた飯田さんは富山房に入つて編集者として辣腕を振るわれたそうですが、若くして亡くなられたことは痛恨の至りです。

ところで、松本重彦先生ですが、慶應で講師をされた後、一九二二年から一四年にかけて、ヨーロッパ、エジプト、シリアに留学されます。本格的にアラビア語の研究を始め、帰国されてから大阪外語で日本で初めてのアラビア語の講座を開設します。その後、京城帝国大学に移り、戦後、大学が廃校になると日本に引揚げてこられ、戦後の混乱期に有志をつけてアラビア語の私的な講習

が受けた学生が実は出でています。飯田忠純さんがそれです。飯田さんは一九二一年の卒業生ですが、「回教法制の源流」という卓越した卒業論文を提出しています。前嶋先生が東大に出した論文より実に七年も早くこのようなイスラム関係の論文が出現したことは驚きです。なぜこんな論文が出てきたのか、やはり松本重彦先生の影響が大変大きかったのではないかと考えられます。飯田さんの論文は、白鳥山脈のようなエスタブリッシュメントなどところで書かれたものでないので人の話題になることが少く、忘れられている面がありますが、イスラム法研究に不朽の礎石を残す、私たちが誇れる仕事の一つです。俊才を詔わされた飯田さんは富山房に入つて編集者として辣腕を振るわれたそうですが、若くして亡くなられたことは痛恨の至りです。

先覚者としての松本重彦先生、その教えをうけた飯田忠純さんが種を蒔いた慶應のイスラム研究は、昭和十年代に入つて見事に開花します。それは井筒俊彦先生の活躍に負うところが大きいのですが、この頃は井筒先生のみならず多くのすぐれた学徒がイスラム研究にひきつけられる雰囲気が戦争遂行、国策との関連で日本にはあつたようです。

とくに、昭和十三年以降、日本は空前のイスラム・

ームを迎えます。この時期を第一次のイスラム・ブームというふうに名づけている人もいます。なぜイスラム・ブームと言われるのかといふと、イスラム関係のことを研究する機関、調査機関が続々と昭和十三年以降できたからなのです。外務省関係では回教圏研究所、大日本回教協会、あるいは外務省調査部で本腰をいれた研究が始められます。それから、満鉄に東亜經濟調査局がつくられます。満鉄の東亜經濟調査局は、私が調べた限りでは、満鉄の直属の機関ではなかつたようです。昭和十四年までは財團法人であつたようですが、時のイスラム・ブームに相応ずる形で、財團法人から満鉄の傘下に入ります。それが昭和十四年なのです。後からお話しする前嶋信次先生の入所は昭和十六年のことです。

慶應も遅ればせながら、同種の、しかしきわめて規模の小さい研究所をつくります。それが昭和十六年にできた語学研究所です。言語文化研究所の前身です。ここで孤軍奮斗の大活躍をされるのが、井筒俊彦先生でした。先生は、前嶋先生よりもずっと早く慶應の中で、ほとんど一人でイスラムの研究を言語学、哲学の見地から始められ『アラビア語入門』、『イスラム思想史』等の不滅の仕事を矢次早に発表したのです。

以上が昭和十三年から戦争が終るまでのイスラム研究の流れなのですが、第二次大戦が終わつた後、日本のイスラム研究はどうなつたのか、慶應における戦後の再スタートについて話をすすめていきます。さて、戦前、あれほど雨後の筈のごとくつくられた国策的な研究所、調査機関は敗戦によつて解体させられます。ところが、私達慶應にとつて非常に幸いだつたのは、語学研究所が辛くも存続したことです。これは語学研究所が私立大学に付属する施設で、戦争協力の度合が低く、にらまれなかつたせいかもしれません。むしろ、戦後の混乱が鎮まると全国の大学に先駆けて、研究所の拡充に力をいれています。それは昭和二十五年になつて前嶋信次先生、遠峰四郎先生のようなイスラム研究者を「研究員」として迎えていることにあらわれています。これは慶應に先見の明があつたともいえますし、時の運に恵まれたとも言えます。いざれにしろ語学研究所があつたお蔭で慶應はイスラム研究の戦後の再スタートを順調に切ることがでました。ほかのアカデミックな研究機関、調査機関、大学では、イスラム研究が戦後、ほとんど途絶してしまつたのです。慶應でこれを経験せずに済んだことは僥倖の一事に尽きます。

このイスラム研究の再スタートを語るとき、忘れてならないのは松本信広先生が果たされた役割の大きさです。松本信広先生ご自身はイスラムの研究者ではありませんでしたけれども、若い時に松本重彦先生の講義を聞いて早くからイスラムの重要性に気づき、飯田忠純さんという一年後輩の人と付き合いもあつたりして、そういう関係からイスラム研究のよき理解者でした。

また、戦中期は井筒先生のこよなきパトロンでした。

卓越したアラビストである井筒先生に対して松本先生は、影になり日向になつてその研究を庇護していたことは有名な話です。このことは、井筒先生が戦前に出された『アラビア語入門』という本の序文を読んでいただければ、いかに松本先生が井筒先生のアラブ研究に理解を示し、保護されようとしたか、読み取つていただけだと思います。しかし、松本先生最大の貢績は、敗戦によつて職を失わっていた前嶋先生を語学研究所々員として招いたことがあります。松本先生と前嶋先生との出会い、何がきっかけで前嶋先生を呼ばれたのか、はつきりとは分りません。先ほど伊藤先生は、井の頭線の永福町の駅でお住いの近いお一人が偶然、出会つたのであろうというようなことを、申されましたが、確かにそれはありえる

ことですし、エピソードとして面白いものがあります。しかし、お二人の見えぬ糸を結びつける伏線として、松本先生が早い時期からイスラム研究の良き理解者であつたこと、井筒先生からたびたび前嶋先生の噂を聞かれていたであろうこと、さらに大事だと思うのは、松本先生と専門を近くする知己の方々に前嶋先生を知る人が多く、——例えば宮本延人さん、馬淵東一さんといった民族学系統の人たちがそれで、前嶋先生とは台北帝国大学の同僚、学友であつた——これらの方を通じて前嶋先生のお人柄について聞き及ばれていたであろうことなどがいろいろ重なつて、前嶋先生を慶應に迎えられたのではないかと考えております。

最後に前嶋先生の学問の特徴とお人柄についてお話し締めくらせていただきます。このことに関する話題に前嶋先生ご自身が『アラビア学への途—わが人生のシルクロード』(NHKブックス)という自伝を残されておりますし、また平凡社で長く前嶋先生訳の『アラビアン・ナイト』の編集担当をされ、親しく先生に私淑されていた窟寺紘一氏が『イスラム学事始め—前嶋信次の生涯』(世界聖典刊行協会)という伝記を著しておりますので、ここで改めて贅言を費やすことはいたずらに屋上

屋を架する誇りを免れません。そこで前嶋先生の人生行路において重要であったと思われる節目を選びながら手短に話させていただきます。

前嶋先生は研究の手ほどきを東大の東洋史学科で受けられました。しかし、自ら確立されたその学風はいわゆる官学アカデミズムとは一味も二味も違う、自由で洒脱で、それでいて人生の辛酸をなめつくしたあとによく出すことのできる枯淡の境地をつねに漂わせるものでした。

先生の書かれたものは理論的なものを大上段に振りかざすということはありません。むしろ理詰めで歴史を書くことを嫌い、徹底的に歴史を記述していくことに喜びを見いだし、「歴史の語り部」たろうと努めた方です。

歴史に文学を接穗するという前嶋先生のこのような学風は、幼少期からの無類の本好き、文学への傾倒が昂じたものと思われます。先生からうかがった話のなかに数学とか理科にかんする蘊蓄ある話があつたように記憶しているので、どちらかというと先生は何でもこなす

オールラウンドの秀才ではなく、文学とか言葉を偏愛し、これにかんしてはとびきりの才能を示す少年ではなかつたかと想像いたします。

このため先生は旧制中学を終えられたあと、東京外語の仏語部（今の東京外国语大学フランス語学科の前身）に進ります。しかし、卒業後、さらに学問を続けたいという思いやみがたく、専攻を結果的には変えることになりましたが、東大の東洋史学科に改めて入りなおされることになります。

私自身、戦前の旧制大学に身をおいた経験がありますので、先生に対しても失礼を失する言い方になってしまふかもしませんが、先生の歩まれたコースは当時の大学生のなかでは少し寄り道をしたことになるのではないかと思います。というのは当時、大学に入るには、国立大学（戦前は仰々しく「帝国大学」と呼ばれていました）の場合、全国でも数少ない旧制高校から進学するのが本道と考えられていましたし、慶應のような私立大学の場合は今後の教養課程の前身にあたる予科から入るのが尋常のコースであったからです。先生のように戦前の学制では専門学校にあたる東京外語から進学することは例外であつたように思います。

このように失礼をも顧みず御経歴の一部について言及いたしましたのは、先生が東大という官学アカデミズムの頂点に位置する大学に身をおいたものの、旧制高等学

校出身者との肌合いの違い、ものの考え方、めざすもの
の違いをひしひしと感じていたと想像するからです。こ
れは同級生の方々の思い出を先生からお聞きした際、私
自身感じとったことですし、先生の終生の学問上のライ
バルとなる松田寿男先生の学問、お人柄と対比すると、

前嶋先生がいわゆる「帝国大学」型の学生でなかつたこ
とがはつきりしてきます。松田先生は、白鳥庫吉が手が
けた「漠北・塞外史」、つまり中国から北、西北部にか
けて広がる内陸アジアの歴史に、漢文史料を徹底的に
使って新境地を開かれた方です。その学風は考証を旨と
しながらも、斬新なアイディアと独特な地理環境論を駆
使して、遊牧社会史に対して鋭利で理論的な構想を次か
ら次へと打ち出しました。松田先生が、風貌もさること
ながらあらゆる面で「動」とすれば、前嶋先生はまぎれ
もなく「静」です。

前嶋先生が松田先生をはじめとする学問の仲間との大
学時代の交友を通じて最初に執筆された、学術論文「カ
スピ海南岸諸国と唐との通交」は、さすがに白鳥庫吉以
來の考証主義の影響が強く、それを継承しようとすると
ころがうがえるものです。しかし、その後につづく先
生の、長く苦渋に満ちた学問の彷徨、遍歴の末に書かれ

たものはいざれも実証主義を踏みはずしてはいないもの
の、それだけにとどまらず、感性に訴えるところのある、
文化の香り高いものに変わっています。

こうした転換をもたらしたのは、生来、先生に備わつ
ていた資質によることはもちろんですが、直接、先生が
大学時代に師事された藤田豊八先生の影響、台湾での十
余年に及ぶ外地生活が大きく関わっているように思いま
す。

藤田豊八先生は当時の「帝国大学」の先生としては異
彩を放つ人でした。若くして中国大陆に渡り、何十年に
もわたり現地の中国人社会に身をおきながら中国研究、
西域史、南海史の研究を続け、人生の晩年を迎えると
する頃になつて日本に戻り、「象牙の塔」でようやく教
鞭をとることになつた方です。この藤田先生について前
嶋先生は「豪放磊落」、「行動的」な方としてあちこちで
その思い出を語っていますが、想像するところ前嶋先生
をもつとも引きつけたのは藤田先生が醸し出すアカデミ
ズムにとらわれぬ「在野性」ではなかつたかと思います。
藤田II前嶋の師弟関係は性格的には動と静のようにみ
えて好対照をなしているようですが、藤田先生の書かれ
たものを読むと緻密で慎重、思いやりの深かつた方のよ

うで、この面でも前嶋先生を傾倒させるに十分なものが
あつたようです。

この藤田先生に見込まれて前嶋先生は大学を卒業して
すぐの年、昭和三年に台湾にわたることになります。よ
く知られているようにこの年、当時、日本の植民地で
あつた台湾の首都台北に日本の大学令にもとづいた「台
北帝国大学」が創設され、藤田先生が東大を辞めてその
文政学部の学部長として赴任し、前嶋先生も同道して史
学科の助手となります。慶應からも江坂先生のお話にも
出てきたように、史学科で人類学、民族学を教えていた
移川子之蔵先生がこの新設の台北帝国大学に移り、この
先生の助手として史学科の卒業生である宮本延人先生が
渡台しました。

大学を卒業してすぐに願つてもないポストを得たにも
かかわらず、前嶋先生の台湾時代は、一般に失意の時代
としてとらえられています。恩師の死、大学内の人間関
係のもつれからわずか四年ほどで大学を辞職し、台南の
旧制中学の先生にならざるをえなかつたからです。その
時の先生のお気持ちは察して余りあるものがあります。
しかし、台湾の南の町での八年余りにわたる鬱々とし
た日々は前嶋先生にとつてイスラム研究の地固めをし、

自分のスタイルを打ちだすのにきわめて重要な時期で
あつたように思います。中央から離れて僻遠の地に暮ら
していたため、時めくものからの交渉をもたずに済み、
独自の途を追求していく自由があつたからです。

昭和十年代に入ると、イスラム研究はもはや講壇の学
にとどまつていられない状況が出てきます。満州の植民
地化、中国、東南アジアへの経済進出、政治支配への野
望という当時の侵略主義的政策に巻き込まれて時勢に乗
る、美学の様相を濃くしていきます。少ないといえこ
れらの地域にはイスラム教徒がおりましたし、戦略的に
もイスラム教徒が居住する地域は重要であつたからです。
こうしたなかで述べましたように、回教圏研究
所のような研究機関がつくられ、多くの人びとが好むと
好まざるとにかかわらずイスラム研究に関わっていくこ
とになります。とくに「西域史」とか「漠北・塞外史」
の名で呼ばれる学問をやつていた人たちが、結果的には
日本の帝国主義的な膨張の二つの流れのうちの一つを表
す「北進論」に呼応するかたちで「陸のシルクロード」
に沿つた研究を質量ともにさかんにおこなうようになつ
てきます。

前嶋先生は、遠く台湾に住み、また性格的にも時勢を

超越するところがあつて、この奔流に巻き込まれるのが遅れます。さらに同じイスラム研究でも地の利と、自らおかれた環境に由るのでしょうか、南海の幸福なる島」台湾から発想する別なイスラム研究の方に引きつけられます。それは本流をなしていた「西域史」、「漠北・塞外史」、「陸のシルクロード」ではなく、「南海史」、「海のシルクロード」からする研究で、言い換えれば南支那海、インド洋、アラビア海からイスラムの歴史に迫ろうとするもので、時が経つにつれ先生の学問にユニークな輝きを帯びさせてくることになります。

台湾に住んでいたこと自体も前嶋先生に人とは違う膨らみを与えました。当時、台湾は日本の統治下とはいえ、まぎりなりにも外国であることに変わりなく、ここで長く暮らすことは貴重な体験を先生に与えたはずです。仄聞するところによればフィールドワークもずいぶんやつたようです。私は先生の学問が基本的に、文化人類学者、民族学者のように行動的だとはぜんぜん思つていませんが、フォークロア、文化史、また社会史にかぎりなく愛着をよせる先生の歴史の学問の特長は、台湾時代の経験に由るところが大きいと推測しています。

先生ご自身は余り多くを語りたがりませんでしたが、

私が学生時代にうけた先生の講義のなかでも台湾とその対岸の福建地方の話は、ご専門のイスラム史の話よりもよほど精彩があつたように記憶しています。台湾の基隆だとか、対岸の福州、泉州だとかの地図を書いて蜜柑がたわわに実るこれらの街々を駕籠にのつて旅行された時の話など、瘴癘の地として聞こえる台湾、閩越の地方に清涼なる風が吹きわたるかのような錯覚にとらわれ、思わず引き込まれたことを覚えてています。

ところで、昭和十五年になつてようやく前嶋先生は台湾から東京に戻ります。満鉄の研究機関の一つであつた東亞經濟調査局に入つて、本格的な研究に復帰することになつたからです。

このような国策的な調査研究機関に入つたことは何か前嶋先生の資質にそぐわない気がしますが、意外にも先生は拘束されることのない時間の自由を最大限に活用して思いつきり好きな研究に打ちこんだようです。職場の性格上、『アラビア地域と歐州勢力』のような時局ものも多く執筆しましたが、むしろこの時期に文化史的な論文を旺盛に書いていることが注目されます。

私たちが興味をもち、ぜひ知りたいと思うのは、こうした国策機関で先生がどのような姿勢で研究を続け、戦

争に対していかなる政治的な考え方をもつていたか、ということですが、これに関連して先生は意外に政治的にしたたかな面をもつていた、ということをまことしやかに、面白おかしく伝えようとするエピソードが残っています。

それは戦中と戦後の二つの時期に関わることです。第一は昭和十七年、川田寿、細川嘉六等の左翼系とみなされた進歩的知識人が『中央公論』、『改造』などの雑誌で時局批判をしたことに端を発する、有名な「横浜事件」

に連座した疑いをかけられ、当局の取り調べをうけたにもかかわらず、それにめげず、屈しなかつたという話です。第二は戦後になつて満鉄東亜経済調査局の中心人物、責任者であり、前嶋先生の直接の上司であつた右翼の大立者②大川周明との関係をアメリカ占領軍の憲兵隊から執拗に尋問されたにもかかわらず、これをのらりくらりとかわしたという話です。

これらのエピソードは戦争に対して前嶋先生がもつていたとされる、相反する考え方引き合いに出しながら、先生の強靭で、したたかな面を強調しようとする願望があらわれているように思えます。先生の精神的な強さを認めることにやぶさかではありませんが、政治的なしたたかさまで誇張して言うのは、脚色がすぎるようで、私

には到底、受け入れることができません。むしろ孤高の影をひきずりながら、政治に背を向けている先生のイメージこそ、人を魅了してやまないものがあつたのではないかでしょか。先生の真骨頂は政治に棹されず、悠々と自らお好きな夢幻仙境の歴史的世界に遊ぶというところにあり、これを踏みはずした先生の姿など幻滅以外の何ものでもありません。

余談になりますが、前嶋先生が取り調べをうけるきっかけになつた「横浜事件」の川田寿さんは、まったくの偶然ですが、塾の経済学部の出身で、戦後、前嶋先生と同じように三田の山で教鞭をとられた方です。労働経済学を専攻した、この川田寿先生については同じ経済学部の教授であつた伊東岱吉先生が『三田学会雑誌』の六十四巻十号に「川田寿君と私」という回想文を寄せていましたので興味のある方はご覧ください。私も学生時代に川田寿先生をちらつとお見かけしたことがあります。その頃は往年の闘士という感じはすっかり影をひそめており、上品な白髪の先生という印象でした。興味あるのはこの川田先生の素性を前嶋先生がご存じであつたかどうかということですが、これについては残念ながらお聞きするのを忘れました。

昭和二十年の敗戦によって前嶋先生は再びせつかく手にいれた、安定した研究の座を奪われることになります。満鉄という植民地会社の研究機関が解体させられたのは致し方ないにしても、戦後五年ばかり強いられた浪人生は苦難の連続であつたろうと推察されます。

しかし、四十歳代の半ばを過ぎてから慶應に入られ、退職されるまでの約二十年間はおそらく学問の上でもつとも豊饒の実り豊かな時であつたはずです。堰を切つたようすまで蓄積してきたものをはきだし、多くのイスラム関係の啓蒙書、専門の論文を発表され、戦争で断絶を余儀なくされた大部分の研究機関を尻目に、慶應のイスラム研究の声価を一挙に高らしめたことがでります。

よく前嶋先生を評する形容として「イスラム学の父」という言い方がされます。これはあまり正鵠をえた表現とはいません。日本のイスラム研究は伝統がないよう置いて、実は戦前のかなり早い時期に時局に迎合するかたちでブームともいえる隆盛の時を経験したことがあり、大久保幸次、小林元といった、前嶋先生より先輩、あるいは同年輩の人びとがオーガナイザーとして獅子奮迅の働きをしていました。

今はもう時効ですから、あえてご披露いたしますが、

前嶋先生の果たされた役割は、正確にいようと、これらの人びとの後を引き継いで戦後、かなり長くつづくことになるイスラム研究の空白期にひとり氣をはき、平明ながらも、心にしみいる格調高い文章で数々の著作をものにし、イスラムの歴史を説き明かした啓蒙史学者としての面にあります。イスラム研究の大衆化ということが起きたとしたら、それは諄々と慈父のごとく歴史を語る、前嶋史学の物語性に負うところが大きいかもしれません。私自身は、先生が還暦に手が届こうとする頃に初めて教えをうけましたが、「東洋史概説」の講義を聴くのは毎週楽しみの一つでした。前嶋先生の話し方は決して雄弁でも、筋だったものではありません。むしろ平板で、訥々としたもので、誰にでも人気があつたというわけではありませんが、聴き慣れていくうちに味が出てくるというものでした。

今までの私の説明の仕方ですと、前嶋先生のイメージは苦難をひとり背負つてきた氣難しい人という誤解をうけるかもしれません。実際の先生は飄々としていて、時たま思わずところでユーモアをいれて人の笑いを誘い出す方でもありました。

ある時先生の研究室に友人と一緒にお伺いすると、若い私たちの気持ちをほぐそうとしたのでしょうか、普段は絶対口にするはずもない話をひとしきりされるのです。それはアメリカ留学時にボルティモアで見たというレバーノーの踊り子の話でしたが、祖父ほども年が違う偉い先生からそのような話をうかがうとなると、下手に相づちを打つわけにもいかず、ひたすらうぶを決めこみ、拝聴させていただきました。先生の人間性に触れて、それからずいぶんと親しみが湧いたものでした（笑）。

慶應のイスラム研究は、戦前に井筒俊彦先生のような学問としての確立は戦後に持ち越されます。敗戦によつて他の研究機関が雲散霧消してしまったのにたいして、極端にいうと慶應のみが文学部と言語文化研究所の二つを核にして、イスラム研究の灯を細々と辛うじて守ることができました。前嶋先生の参画、さらに法学部でイスラム法の講義を担当するようになつた遠峰四郎先生、文学部の非常勤講師としてトルコ史を教えられた三橋富治男先生等のご尽力によつて戦後のイスラム研究に関するかぎり、他の大学を一步も二歩もリードすることができるようになつたのです。

前嶋先生は決してオーガナイザーではありませんでした。しかし、人生の大半を、師に対して不遜な言い方かも知れませんが、脇道を歩きながらイスラム研究という前人未到のフロンティアを探しだし、それを個人的な職人芸で世の中に広めてきた功績は大きいと思います。今や、イスラム研究は前嶋先生の時代のように未開拓なものではなくなっています。むしろエスタブリッシュメントな学問領域になつてきました。むしろエスタブリッシュメントな学問領域になつてきた感さえあります。これに安住しきつてしまふことは危険なことで、改めて前嶋先生の開拓者精神を思い起してみるとが必要なのかもしれません。

三木 どうもありがとうございました。

坂本先生は、前嶋先生ご自身、及びそれをめぐる方々や事柄について大変克明に話していただいたので、この後、私はコメント程度にしたいと思います。

いずれにしても、三人の先生方が皆さん實に懇切な熱弁をふるつていただいたので、予定より時間が少し長引きましたので、ちょっと休憩したいと思います。

四時半に再開したいと思います。